

反転語「素因」・「因素」について

——語彙史を中心に

鄒 文 君

一、はじめに

本稿は漢語「素因」と「因素」について考察するものである。「素因」と「因素」は字音形態素が同じで字順が相反する漢語語彙である(以下、「反転語」とする)。現代では日本語の語彙として「素因」が、中国語の語彙として「因素」が使用されているが、それぞれが逆に、現代中国語では「素因」が、現代日本語では「因素」が通用しないという現象がある。

『日本国語大辞典』と『漢語大詞典』の記載によると、中国と日本の古典においては両者とも出典はなく、近代に造出された語彙だろうと想像される。そのうち、「因素」の用例が二〇世紀以降のものが多いのに対し、「素因」は一九世紀中期江戸末期の用例「プロムトン(地名)の大病院にては、少壮の人肺労の素因ある者に之を常服せしめて、其病の発生を防ぐと云へり」⁽²⁾があり、比較的早く登

場している。また、「素因」の早期の用例は医学関係であり、「ある病気に対してかかりやすい素質」という意味で使用されている。⁽³⁾他に、文字通り「もととなる原因」という意味でも使われているが、載せられた用例は比較的晚い時期のものである。「病気にかかりやすい素質」という具体的に制限された意味用法よりも、文字通りの「もととなる原因」の意味用法のほうが晚いのはいかにも不思議である。

一方、「因素」は「素因」の「根本的な原因」という意味に近い「物事の発展の決定的原因、条件」という意味を表すことができ、「両語の間で意味上の類似性が見られる。そのほか、「素因」には見えない「物事の構成要素、条件」という意味を示すこともできる。前記で言及された素因の「病気にかかりやすい素質」という意味を含め、両者の意味機能は完全に一致するとは言えない。

また、「素因」「因素」というような反転語は日中両言語に多数存在し、問題視されるものが多い。それらの反転語には、「平和・和

平／和平・平和」のように両言語において反転語の二種類ともに使われているものと、「歓喜／喜欢・欢喜」、「運命・命運／命运」のように一方の言語では両方とも使われているが、他方の言語では片方しか使われていないものがある。それらと違い、「素因」「因素」はそれぞれ片方の言語にしか現れない。これと同種類の反転語には、他に「制限」「限制」や「詐欺」「欺詐」などがある。

張巍(二〇一〇)では、日本語における「同素逆序汉字词」に対する意味用法別の分類が行われ、また、現代中国語でそれらの語彙に相応するものも集められている。しかし、本稿でテーマとする「素因」「因素」が収録されていないほか、単純な意味上の分類であり、語源や語構成には触れられていないため、うまく説明できないものも多数存在する。また、馬雲(二〇一四)では、「素因」と「因素」における意味が部分重複で、ずれがあることが指摘されているが、そのずれが生じる原因、字順の逆転との関係については論述されていない。

従来の考察においては、「素因」が日本で造語され、その後中国に移入され、何らかの理由で字順が反転して「因素」になったという推測がなされている。しかし、今回、「因素」が日本側の資料にも存在していた証拠を発見した。そこで、日本における造語である可能性があることから、両者に対してさまざまな面から再考察すべきである。本稿では、資料分析の方法として、「素因」と「因素」に対して、語源、語構成、意味機能およびその歴史的推移などを詳

しく考察し、反転語「素因」「因素」における不明な点を徹底的に解明したい。

二、「素因」の造語と受容

二・一 「素因」の語源

前掲『日本国語大辞典』において、「素因」の比較的早い用例として『七新薬』における用例が取り上げられている。「肺労の素因ある者」に「肝油」という新薬を常服させると肺労の発生を防ぐことができるといふ。「素因」が司馬氏による造語である可能性も考慮されていたが、今回の考察によって『七新薬』以前に既に存在した証拠が見つかった。作成年代が一八五七年とされる『扶氏経験遺訓』において、「素因」という語が多用されている。「扶氏」とは、ドイツのベルリン大学教授扶歇蘭度(フーフェランド、C. W. Hufeland 一七六二—一八三六)のことである。『扶氏経験遺訓』は、緒方洪庵(一八一〇—一八六三)が扶氏の原作『Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis』(『医学必携』)のオランダ語版(『Enchiridion medicum: Handleiding tot de geneeskundige praktijk』)を訳したものである。

凡非常ニ刺衝シテ運営ノ偏倚ヲ起ス者ハ皆熱病ノ誘因トナル。

寒暖變革、腸胃汚物、天行毒、傳染毒等其最ナル者ナリ。而素因ハ特ニ血管系ニ在テ神經系ニ拘ラス 故ニ依ト昆瑛兒歌以私的里家ノ如キハ神經系病弱ナレトモ急性熱ニ罹ルコト少ナシ
〔扶氏經驗遺訓 卷一〕 安政四年（一八五七）刊

上記は『扶氏經驗遺訓』における「急性熱病」の病因についての段落である。「寒暖變革」や「傳染毒」などの「誘因」に対して、「神經系病弱」という「素因」が取り上げられている。このにおける「素因」とは、氣温変化や伝染病など外部からの直接な原因（誘因）に対する内部的な原因をさすのであろうと推測される。

また、ドイツ語原文とオランダ語訳との同じ段落を対照してみると、「素因」がドイツ語「Disposition」が、オランダ語「voorbeschiktheid」で訳されていることがわかる。一九世紀前期蘭学が盛んで、『扶氏經驗遺訓』自体もオランダ語訳から訳したものであるため、「素因」の意味がオランダ語由来ではないかという疑念もある。

Die Veranlassungen können aufserst mannigfaltig sein. Alles was einen betrachtlichen Reiz oder aufgehobenes Gleichgewicht im Organismus erregen kann, kann Fieber erregen, am häufigsten Wechsel der Temperatur, gastrische Anhaufungen, epidemischer und kontagiöser Einfluß. Auch ist

eine gewisse Disposition unverkennbar. Sie liegt mehr im irritabeln als im sensibeln System, denn nervenschwache, hypochondrische, hysterische Menschen sind weit weniger den akuten Fiebern unterworfen als andere.

〔Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis〕 1837

De aanleidingen kunnen hoogst menigvuldig zijn. Alles, wat eenen aanmerkelfijken prikkel of verstoring van het evenwigt in de bewerktuiging kan te weeg brengen, kan koorts verwekken, het menigvuldigst, afwisseling van de temperatuur, gastrische onzuiverheden, epidemische en besmettelijke invloeden. Ook is het duidlijk, dat er eene zekere voorbeschiktheid bestaat. Zij ligt meer in het stelsel der prikkelbaarheid, dan in dat der gevoeligheid; want zenuwzwakke, hypochondrische, hysterische menschen zijn veel minder aan heete koortsen onderhevig, dan andere.

〔Enchiridion medicum: Handleiding tot de geneeskundige praktijk〕 1841

ちなみに、『扶氏經驗遺訓』において他の「素因」が現れたところを見れば、カウヂヤ「儂麻質」と「神經錯亂」の「素因」に

ての段落およびオランダ語原文が取り上げられている。

而素因ハ温被過度 密室ノ生業閉蟄シテ外氣ニ觸レス逸居シテ
肢體ヲ動サス或全軀若クハ一部ノ衰弱寒粘液質稟賦等ナリ。然
トモ此病ハ素因ナキモ能發スル

〔扶氏經驗遺訓 卷六〕 安政四年（一八五七）刊

De voorbeschikkende oorzaken zijn: te sterk warm houden,
waardoor de gevoeligheid der huid ziekelijk verhoogd wordt,
ontwenning van de lucht, het leven in beslotene kamers,
gebrek aan beweging, algemeene of plaatselijke zwakte, koud,
slijmachtig, lymphatisch, phlegmatisch gestel.

Maar ook zonder eenige voorbeschiktheid kan
rheumatismus ontstaan...

〔Enchiridion medicum. Handleiding tot de geneeskundige
praktijk〕 1841)

素因亦數般アリ知サル可ラス〔第一〕遺傳 父母之ヲ兒ニ譲リ
兒亦孫ニ傳ヘテ一血屬ノ固有病トナレル者常ニ多ク實驗スル所
ナリ

〔扶氏經驗遺訓 卷八〕 安政四年（一八五七）刊

Bijzondere opmerkzaamheid verdient de aanleg/voorbeschikkende oorzak) der zielsziekten. Daartoe behoort bovenal de erfelijkheid. Het is, helaas! door de ondervinding genoegzaam bevestigd, dat de aanleg van de ouders op de kinderen kan overgaan en aldus in de familie eigen worden.

〔Enchiridion medicum. Handleiding tot de geneeskundige
praktijk〕 1841)

上記に「素因」が訳されているように、オランダ語の訳文では「voorbeschikkende oorzaak」が「voorbeschiktheid」があることがわかる。「voorbeschiktheid」が名詞で、「voorbeschikkende」が動詞「voorbeschikken」の過去形であり、「原因」の意味を表す「oorzaak」の前に付く「voorbeschiktheid」と同義であると考えられる。少なくとも『扶氏經驗遺訓』においては、「素因」がオランダ語「voorbeschikkende oorzaak」と「voorbeschiktheid」に対する訳語であることが明らかである。また、「素因」の「つ」として「erfelijheid」に「遺伝」という訳語が当てられることもわかった。

次に、同時期の蘭和辞書『波留麻和解』（江戸ハルマ）と『道訳法見馬』（長崎ハルマ）で調査してみる。両辞書とも「voorbeschiktheid」の項目が無かったが、関連語彙に動詞の「voorbeschikken」と名詞の「voorbeschikking」があり、長崎ハルマには「前以前の世話

過去の因縁」という意味が記載されている。

Voorbeschikken. 常ニ固ク信スル

Voorbeschikking. 同上ノ支： 預メ定メ固ム

(『波留麻和解』 一七九九年)

Voorbeschikken. 前以てそれなりに片付る

Voorbeschikking. 前以ての世話 過去の因縁

(『道訳法児馬』 一八三三年)

右を参考にすると、病因として取り上げられる「素因」は「以前からの原因」と理解してよいと考えられる。司馬氏と緒方氏は両者ともに蘭学者であるため、「voorbeschiktheid / voorbeschikking」の訳語として「素因」を導入したように推測される。

また、執筆年代が嘉永二年（一八四九）以前、緒方氏の処女作とされている『病学通論』においても「素因」の使用が判明した。これも今回の考察で見つかった用例のうち时期的に最も早いものである。「病ノ素因」については、「諸病又男女稟賦、體質、年齢、衣食、生産等ニ準フノ區別アリ」という説明がある。これは現代病理学における「年齢素因」「性別素因」などに該当する。上記では、「素因」によって、人間それぞれの「ある病気に対してのかかりやすさ」が異なるということになる。「素因」は原因をさすこともでき、「素因」

による結果「ある病気にかかりやすい」「ある病気と因縁がある」ことをさすこともできるという独特な意味特徴を持つことが分かる。

諸病又男女稟賦、體質、年齢、衣食、生産等ニ準テノ區別アリ
亦察病施治必究ノ要務ナリ。然トモ是多クハ病ノ素因ニ涉ルカ
故ニ病因編ニ論載ス

(『病学通論』 年代不詳)

原文には「病因編ニ論載ス」とあるが、今回の考察ではその「病因編」の部分は見つからなかったため、その部分における「素因」について検証ができない。今回の考察において最も遺憾なことである。

さらに、『日本国語大辞典』によると、奥山虎章の『医語類聚』(一八七二)には英語「Predisposition」の訳語として「素因」が見える。実際に、「predisposition」の類語には「disposition」があり、ドイツ語の語彙でもある。「素因 / voorbeschiktheid」の対訳に該当し、前掲『扶氏経験遺訓』のドイツ語の原文にも現れている。ほかに、『華氏内科摘要』(ヘンリー・ハルツホルン (Henry Hartsorne) 著、桑田衡平訳 一八七二)には「素因病」という項目があり、その「素因病」とは、原作『Essentials of the principles and practice of medicine : a handbook for students and practitioners』(Henry Hartsorne 1869) における「Diatheses

(diathesis)」の訳語である。性別・年齢などによってその病気にかかる確率が顕著に違うことが「リウマチ」などの「素因病」の特徴であると記している。

『和英語林集成 三版』(James Curtis Hepburn 一八八六)の英和の部には「DIATHESIS, n. Seishitsu; sho soin」とあり、辞書の見出しとしては、これが最初かもしれない。国語辞書における収録は、明治四〇年に出版された『辞林』がある。⁽⁴⁾また、『大言海』にも「素因」の項目があり、「和ノ通用字」とされている。⁽⁵⁾ただし、「素因」の医学用語としての意味には言及されていない。

二・二 中国語においては

同じ一九世紀に著された『西醫略論』(合信(Hobson, Benjamin)著 一八五八)を取り上げてみる。

病炎有内外多少新舊之不同。内因身弱癩瀝疔毒。外因跌打損傷或風濕凍瘰之類。

此處病名髀白証。十五歳以下童子最多、病原或因體質素弱或因跌打或因坐臥濕地。

(『西醫略論 中篇上』一八五八)

「交節証(關節病)」の章節を例にして、病因について論述する場合、中国医学の伝統的な「三因論」⁽⁶⁾に従って「内因」と「外因」が使われている。しかし、『西醫略論』において、遺伝や身体素質の差など先天的素因を表現する場合には、「(因)體質素弱」以外、特定の語が使用されていない。「素因」が和製漢語であることは明らかである。

一方、「素因」は「predisposition」の中国語訳として『英華大辭典』⁽⁷⁾に収録されているが、定着していないようである。現代語では「傾向」「体質」と言われるのが一般的である。⁽⁸⁾ほかに、「diathesis」も『英華大辭典』に「易感某病性質、病之素因、易感性、易於沾染病症之性」とあるが、現代語では「素質」と言う。たとえば、「gouty diathesis」「hemorrhagic diathesis」は「痛風素質」「出血素質」と訳される。実際に、日本語で「predisposition」を「傾向」「体質」、「diathesis」を「素質」などと訳されることもあるが、これらの訳語のうち、唯一「素因」だけが中国語に定着していない。⁽⁹⁾

二・三 日本語における「素因」の使用

「素因」は長い間、医学分野にのみ使用されていたが、一九世紀末期から次第に他の分野にも導入された。たとえば、明治二八年(一八九五年)に刊行された『社会学』には、「社会的現象ノ素因」という章があり、明治二九年(二八九六年)に刊行された『欧米各国

株式会社要解』には、「近世ニ於ケル株式会社拡張ノ素因」という章がある。内容からみると、いずれも「もととなる原因。根本的な原因。」の意味かと思われる⁽¹⁰⁾。しかし、主に医学分野で用いられていることには変わりはなく、今日に至っても、「素因」の使用例は医学関係のものが八割近くである⁽¹²⁾。

三、「因素」の成立

三・一 「因素」の造語

「素因」の反転語「因素」の由来について、従来「素因」が中国側で反転された造語という説があつたが、今回の考察で、「因素」が日本側の資料に存在していた証拠が見つかった。明治二十一年（一八八八）の訳書『経済範論』（エミール・ラヴレー著、アルフレッド・ダブリウ・ポーラード英訳、エフ・ダブリウ・トリーシグ補、珍田捨巳等重訳）においては、「諸因素」に「ファクトアス」というルビが振られている。「（諸）因素」が「Factors」の訳語として登場している。その中で「自然」「労力」「資本」が「生産ノ三大因素」とされている。その由来については、「素因」と関係がある証拠はない。

「第二編 生産ノ諸因素及生産的労働ヲ論ス」
夫レ物ヲ生スルニハ自然、勞力、資本ノ三因素ヲ要スルナリ

『経済範論 上巻』 一八八八

また、「因素」の語構成については、『哲学字彙』などの辞書に示されている「factor」の訳語「因数（因子）」と「要素」によるものと推測される。その場合、構成要素の「因」と「素」は並列関係である。実際に、「因」という字が用いられた漢語「因果」「因縁」「因業」などはこの種のものが多い。

三・二 「因素」の類語

それ以前に、「因素 (Factors)」のことを「要物」(『小学経済論 卷之1』 城谷謙編 一八八二) や「必要件」(『経済原論』 天野為之著 一八八六) などと訳されたこともあつたが、以降は「要素」が主流になったようである。上記『経済範論』の原文に対する翻訳は、ほかに、『経済学粹』（羅貌礼 (エミール・ド・ラブレイ) 著、エー・ダブリウ・ポーラード訳、牧山耕平重訳 一八九四) があり、その中では「生産ノ三大因素」が「生産ノ三要素」というように重訳されている。「因素」が「Factor」の訳語としては定着していないようである。しかも、一語としては残留できず、今日に至っては『日本国語大辞典』にすら収録されていない。

辞書の記載からみると、「因素」の登場以前に、「要素」という語がすでに使用されている。前掲した通り、訳語の定着に重大な影響

を与える『哲学字彙』には「factor」の訳語として取り上げられ、そして当時の流行小説であった『当世書生氣質』にも登場している。⁽¹³⁾ これも「因素」が日本で定着しなかった理由の一つであろう。

しかし、多数とは言えないが、当時「因素」が採用された例もある。下記のように、経済学に限らず、社会学や政治学分野の著作にもその痕跡があり、いずれも「要素 factor」の意味であると考えられる。とりわけ、マルクス経済学関連の著作に見え、のちに中国側の語彙使用にも影響を与えたと推測される。

今民族精神の實質たる共同心理的性質及び共同心理的内容を決定する根本的因素として、余は先づ民族の人権的成分或は要素と地理的境遇とを擧げたいと思ふ。

（『民族心理講話』 米田庄太郎 一九一七）

ラッソウとポーレ——従つて先に社會と國家經濟とを併せて一範疇としたことに反對したと同一の學者——はこの兩因素が獨立した地位を體系中に占めることを一般に否定せようとする。

（『政治学体系要論』 ルドルフ・チエレーン 著、岩田静郎 訳

一九二六）

「生産力」の意義——社會的生產行程に適用されるすべての諸力——労働力、技術（機械）力、自然力——物的生産力と人的

生産力——生産力構成の一因素としての自然力——労働のみが「すべての富の源泉」ではない……

（『マルクスの経済概念』 ハイインリッヒ・クノー 著、

社会科学研究会法制研究会 訳 一九二七再版）

三・三 中国語における「因素」の受容

中国語における「因素」の受容を明らかにするため、日本語訳と中国語訳『資本論』における語彙の使用を検証してみる。ここでは、日本語訳は昭和二年（一九二七年）に出版された高畠素之訳版、中国語訳は一九三八年に出版された郭大力・王亜南訳版を取り上げることにする。日本語で「因子」と訳されている部分に、中国語では「因素」と訳されている場合が見える。中国語版の二人の訳者のうち、王氏は日本に留学した経験があり、留学期間中は大量のマルクスの著作を読んでいたと言われている。日本語一般においては主流な言葉ではないが、一部のマルクスの著作に使用された「因素」が中国留学生によって中国に移入されて、多用されるようになった可能性も考えられる。

商品生産の物的因子と人的因子を代表するものであつて、此等の因子の特性が生産すべき物品言ふ迄もない。

（『資本論 第二卷』 マルクス 著、高畠素之 訳 一九二七）

那就是商品生産之人的因素和物的因素。這種因素、當然要具有與所產物品種類相應的特性。

〔資本論 卷2〕郭大力、王亞南訳 一九三八

四、「素因」と「因素」の關係

四・一 「素因」と「因素」は同義語なのか？

上記の考察によると、造語的には「素因」と「因素」とは無關係であることがわかる。両者とも原因を示すことができる点で共通しているが、具体的な意味と使用範囲が異なっているため、類義語とは考えにくい。本来は単なる字順が反転する語と見られてきたが、一部の日本語において「素因」が使われた場面で、中国語では「因素」がもちいられているのである。たとえば、病理学の概念として中国語の「年齢因素」「人種因素」「遗传(性)因素」が日本語の「年齢素因」「人種素因」「遺伝素因」に相応する。この現象を根拠として、「詐欺」「欺詐」などと同じように「素因」「因素」が同義關係にあるという考え方もあるが、それについて筆者は疑問視している。

まず、日本語における「素因」は基本的に病因のうちの内因をさすのに対して、中国語における「因素」は内因も外因も表すことが

可能である。たとえば、中国語の「生物性因素」「化学性因素」などが、日本語で言うところの「生物的外因」「化学的外因」となる。⁽¹⁵⁾

実際に、上記の概念の外国語訳が明記された病理学の著作が多数存在する。大正十年の『近世齒科全書』を例とすると、「外因」に「化学的病因 Chemical Factors」「細菌的病因(生物素因) Bacteriological Factors」があり、「内因」に「生理素因 Physiological Disposition」「病的素因 Pathological Disposition」とある。そして、それぞれの下位分類に「人種 Race」「年齢 Age」と「遺伝 Heredity」がある。⁽¹⁶⁾ 前掲の「素因」が「Disposition」「因素」が「Factors」の訳語であることをみた。これらによって、病理学概念としての「Race」「Age」「Heredity」が、現代日本語のように上位分類の「素因 Disposition」にしたがって「人種素因」「年齢素因」「遺伝素因」と訳されることも、または、中国語のように外因の「素因 Factors」に合わせて「年齢因素」「人種因素」「遗传(性)因素」と訳されることも、いずれも道理にかなう。「素因」と「因素」は、翻訳方法によって一部の造語が同じ意味であるように見えるが、それ自体は決して同義語ではないことが明らかである。

四・二 「素因」が中国語に定着しない理由

前掲で二〇世紀初頭に「素因」が「predisposition」「diathesis」の訳語として『英華大辭典』に掲載されていたことがわかったが、

「因素」と違って中国語には定着しなかった。その理由は私見によれば、分野の制約と反転語の法則にあると考えられる。

政治学や社会学などと比べると、医学、とりわけ病理学は一般人がふれる機会が少ない学問である。しかも、中国では近代医学の発展が比較的遅れていたため、術語の定着も遅れたように考えられる。「遺伝因素」や「生物性因素」などの術語の使用は、おそらく「因素」という語が定着した後のことであろう。その時に、仮に「素因」という語が当時の学者たちに認識されていたとしても、中国語としては一般的に用いられていた「因素」の方がより使いやすかったと見られる。

また、語源と語用が完全に解明されていない段階では、「素因」と「因素」が中日両言語に多数存在する類義関係にある反転語だと勘違いする確率が高いであろう。その場合、「素因」の語構成については、「もとの原因」ではなく、「因素」と同じように、「素(要素、元素)」と「因(因子、原因)」による並列関係にあると見られる可能性も高い。陳愛文・于平(一九七九)では、類義的あるいは対義的な要素から構成された複合語において、意味上から原因が探し出せない場合、二つの字は声調(四声)⁽¹⁷⁾の順にならぶ傾向が強く、その比率は常用三〇〇〇語のおよそ八割におよぶという⁽¹⁸⁾。それによると、「素」(去声)と「因」(平声、陰平)は、「素因」(去入平)より「因素」(平去)の順に並ぶほうが、中国語として自然で、「因素」を「素因」に替えるのは無理があるということになる。すなわ

ち、「素因」は中国語に定着する可能性が低いのである。

五、おわりに

本稿は、反転語「素因」と「因素」の語源や歴史について考察した。「素因」は、江戸末期に「もとの原因」、「因縁」を意味するオランダ語「voorschiktheid」などを訳すために、蘭学者によって造語されたものである。「素」が「もとより」を意味し、「因」が「原因、因縁」を表す。「素因」は外部の要素によって誘発される「誘因」と相對して、物事の内部の固有の性質によって自発する原因を示し、最初は医学用語として使用され始めた。また、その内的原因によって、ある病気に対してかかりやすい性質を表すこともあった。明治以降、医学以外の分野にも使用されるようになり、「根本的な原因」をさすようになった。まとめると、「素因」は以下の三つの意味に細分される。

- (一) 「誘因に対して」もとからの原因。内因。internal cause、
(pre) disposition]
 - (二) 「ある病気に対してかかりやすい性質、体質。diathesis/
(pre) disposition」]
 - (三) 「もととなる原因、主因。prime cause」]
- 一方、「因素」は、最初は『経済範論』などの訳書で「factor(要素)」の訳語として造語されたもので、日本語においては語として

定着しなかった。しかし、のちに中国語に移入され、「原因」「要素」の意味で一般的に用いられるようになった。「素因」と造語的には無関係である

「素因」と「因素」は両者とも「原因」の意味を示すことができ、それぞれの言語で用いられて同一の概念を表す場合もあるが、語構成的には異なっているということ、同義語ではない。

本研究においては、「因素」が日本語に残らなかった原因、「因素」が中国に移入された経緯などについてまだ明らかになっていないところも多く、両者の語源についてもまだ考察する余地がある。今後は未解明の資料を丁寧調査し、さらに研究を充実させていきたい。

注

- (1) この類の漢語の呼称は統一されていない。「反転語」以外には、「逆字順二字漢語」(鈴木丹士郎 二〇一一)などがある。
- (2) 『七新葉 下』、文久二(一八六二)刊
- (3) 「素因」の解説(2)には「ある病気に対してかかりやすい素質。年齢・人種・性別などによる一般的素因と、特異体質・滲出性体質など個人にみられる病的な個人的素因とに分けられる。」(『日本国語大辞典』一九〇七)
- (4) 「其結果を来たす原因の中に、最ももととなるもの。」「辞林」、一九〇七)
- (5) 「其結果ヲ来ス原因ノ中ニテ、最ももとトナルモノ。正因。主因。」「大言海」、一九三三)
- (6) 「三因」とは、「内因」、「外因」、「不内外因」であり、宋・陳言の『三因極一病證方論』には「然六淫天之常气、冒之则先自经络流入、内合于脏腑、为外所因。七情人之常性、动之则先自脏腑郁发、外形于肢体、为内所因。其如饮食饥饱、叫呼伤气、尽神度量、疲极筋力、阴阳违逆、乃至虎狼毒虫、金疮跌打、疰忤附着、畏压溺等、有背常理、为不内外因。」とある。
- (7) 原名：英華大辭典 An English and Chinese Standard Dictionary (顏惠慶、一九〇八)
- (8) 「傾向・癖性：(易患某种病的) 体质」(『牛津高阶英汉双解词典 第七版』、二〇〇九)
- (9) 『英汉医学词典』(上海科学技术出版社)と『医学英和辞典』(研究社)を参照した。
- (10) 「凡そ人間社會に顯る、所の現象は之れが素因を分て二種とす一は人間固有の性質に在るもの今一は人間所在の境遇に存在するものなり」(『社会学』、辰巳小次郎述、一八九五)
- (11) 「大資本ノ需要ハ既ニ多數ノ株式會社設立ノ素因タラサル」判然タリ」(『欧米各国株式会社要解』、草鹿丁卯次郎、一八九六)
- (12) 現代日本語書き言葉均衡コーパスを使って「素因」の用例を検索した結果、総数六一例のうち、医学関係の用例は四八例である。
- (13) 「彼の色恋の道なんども此世の中には必要なる、一箇(ひとつ)の要素(エウソ)でそろ盤外、思案の外なる恋あるゆゑ」(『当世書生氣質』十四、坪内逍遙、一八八五—一八八六)
- (14) 「病氣の原因を内因と外因に分けて考えた場合、内因のうち、生まれたときから備わっているある疾病に対し特別な感受性を有する状態をいう。」(『南山堂医学大辞典』、二〇一五)

- (15) 『新病理学総論』(日本医事新報社、二〇〇八)と『病理学基礎』(高等教育出版社、二〇〇四)参照
- (16) ほかに、「外因に「栄養障害[Nutritional Disturbance]」「理学的原因 Physical Factors」があり、内因に「免疫 Immunity」があつて、「生理的素因」に「性Sex」「組織及臓器素因 Tissue or Organ」があり、「病的素因」に「体質 Constitution」「稟賦 Temperament」「特異質 Idiosyncrasy」「後天的素因 Acquired Disposition」がある。
- (17) 中古漢語では平声・上声・去声・入声をいう。現代中国語の普通話では入声が失われ、平声が二つに分かれているため、陰平(第一声)・陽平(第二声)・上声(第三声)・去声(第四声)をいう。
- (18) 「並列式双音式的字序」『中国語文』第六期(陳愛文・于平、一九七九)。荒川清秀(二〇〇〇)参照。

参考文献

- 天野為之 『経済原論』、富山房、一八八六
- 荒川清秀 「健康」の語源をめぐって、『文学・語学』一六六号、日本古典文学会、二〇〇〇
- 緒方洪庵 『病学通論』、年代不詳
- 緒方洪庵 『扶氏経験遺訓』、心齋橋通安堂寺町(大坂)：秋田屋太右衛門、安政四年(一八五七)刊
- 顔惠慶 『英華大辭典 An English and Chinese Standard Dictionary』、上海商務印書館、一九〇八
- ハインリッヒ・クノー著、社会科学研究会法制研究会訳『マルクスの経済概念』、同人社書店、一九二七再版
- 桜井勇 監修『新病理学総論』、日本医事新報社、二〇〇八
- 佐藤運雄 『近世歯科全書』第5巻、東洋歯科月報社、一九二二
- 司馬凌海 『七新薬』、心齋橋通安堂寺町(大坂)：秋田屋太右衛門、文久二(一八六二)刊
- 城谷謙 編『小学経済論』、金港堂、一八八一
- 鈴木丹士郎 『西国立志編』の逆字順二字漢語、『国語学研究』五十、東北大学文学部、二〇一一
- 張巍 『中古汉语同素逆序词演变研究』、上海古籍出版社、二〇一〇
- ルドルフ・チエレーン著、岩田静郎訳『政治学体系要論』、政治学普及会、一九二六
- 丁 运良 主編『病理学基礎』、高等教育出版社、二〇〇四
- 『南山堂医学大辞典』第20版、南山堂、二〇一五
- Halma, Francois、稲村三伯 『Nederduts woordenboek』、寛政八年(一七九九)
- F.Halma 原著、Hendrik Doeff 編著、吉雄権之助『ほか訳』『道訳法児馬』、『坪井信道(写)』、書写年不明
- 馬雲 『日本語と中国語とで字順の逆転する二字漢語：日本語の漢語が中国語で逆転するものを中心に』、日本語研究、三四、二〇一四
- C. W. Hufeland 『Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis』、Jonas Verlagsbuchhandlung, 1842
- C.W. Hufeland, vertaald door H.H. Hageman Jr.『Enchiridion medicum: Handleiding tot de geneeskundige praktijk』、Bij H. D. SANTBERGEN, 1837
- ヘンリー・ハルツホルン(Henry Hartshorne)著、桑田衡平訳

『華氏内科摘要』 一八七二

Henry Hartsorne 『Essentials of the principles and practice of medicine: a handbook for students and practitioners』, HENRY C. LEA, 1871

Hobson, Benjamin 著、管 茂材同撰『西醫略論』、東都：老臣館 萬屋兵四郎、安政五年（一八五八）

マルクス 著、高島素之 訳『資本論 第二卷』、改造社、一九二七

馬克思 著、郭大力、王亞南訳『資本論 卷2』、生活・讀書・新知 三聯書店、一九三八

米田庄太郎『民族心理講話』、弘道館、一九一七

エミール・ラヴレー 著、アルフレッド・ダブリウ・ポーラード 英訳、

エフ・ダブリウ・トーシック 補、珍田捨巳 等重訳『経済範論』、敬業社、一八八八

羅 竹風（主編）『汉语大词典』、汉语大词典出版社、一九九二

羅貌礼（エミール・ラブレイ） 著、エー・ダブリウ・ポーラード 訳、

牧山耕平 重訳『経済学粹』、経済雑誌社、一八九四

和英語林集成デジタルアーカイブス

<http://www.meijigakuin.ac.jp/ngda/wae/> 明治学院大学図書館

（すう ぶんくん 大学院博士課程後期課程在学学生）